

桃をりて君がみ髪にかざしみんみはゞいかに春うつくしき

紅葉會詠草

山の

人

わた殿にさゞめく人の影消ゆて花ほの白う月かたふきぬ
峠より見下す里の春祭杉の森ごし旗ひるかへる
髭白き禰宜にあひけり逍遙の社の梅に雨はれし朝
松三里今朝遠乗の濱つたひ霞うすれて白帆たゞよふ
花ふかき樓の東に笛さむてあとは靜けき薄月夜かな
ながき日を軒の鸚鵡に戯るゝ妹の袂に花ちりかゝる
花賣の少女に今朝もゆき逢ぬ葉桃かけさす小川のはとり

俊左

久

藤によれる能樂殿の夜の雨鼓わびしくともしゆらぐよ
恨みわび桃の蕾を白壁ににじり書くかな人を呪ひの歌
洗髪に春風ゆらぐおぼしまや櫻ひら／＼日は今午なり
麥笛をふきつゝ歸る里の路家の灯見ゆる菜の花月夜
簫やめて鐘のゆかりを説く御僧落つる椿に又ふりかへる
金屏に歌會の燈ゆらきそめて院の春雨軒端にふけぬ

眺めてわなもひにふける夕空に流る、雲の行方しらずも
よの戀にやぶれしとどこ春山の十歩の畑に麥の草とる
黙念の僧見かへりぬ床の間に鉢の牡丹の花はくづれて
中庭の青葉かくれに梅の實の數見ゆろめぬ春ゆくらしも

篠

水

乗りすてゝ宮居の内へ人はいにぬ駒なる鞍に白き桃散る
日毎來て文字書きならふ丸窓に葉柳しげり晝の雨ふる
山に住む友おとづれて長き日を茶の烟廻り茶の芽摘けり
わび住みの日ゝ歌思ふ窓の外に赤くなりけり鬼火一つ
何となくたんば廻て野雲雀の巣を見出けり豆の葉隠れ

折にふれてよめる

紫

陽

うちわたす河邊の里の朝けぶり殘ると見しは柳なりけり
雨はれしなこりの露もなつかしく匂ひこぼるゝ花の色哉
雨霽て色ます野へのつは葦摘みてもゆかん露にぬるとも
箱崎のうらのまつ風こゑたれて霞に沈むあまの釣舟
春の野はすゞなすゞしろ咲滿て花の錦となりにけるかな